



全国棚田(千枚田)連絡協議会

棚田ライタラス

第53号 2009.12.15
(年3回発行)

発行／全国棚田(千枚田)連絡協議会

編集／ふるきやらネットワーク

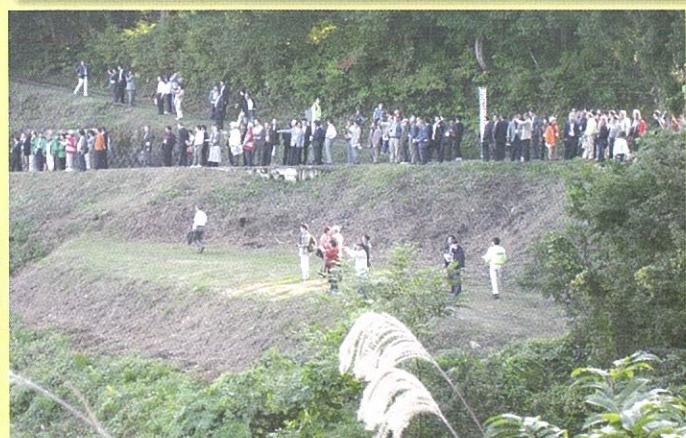
〒184-8577 東京都金井市町65-3ふるさときやらん内

TEL:042-381-6721 / FAX:042-383-8614

<http://www.yukidaruma.or.jp/tanada/>



第15回全国棚田(千枚田)サミット1日目、棚田見学会のようすから。松代地域星峠の棚田にて



松代地域蒲生の棚田にて



地元のお母さんたちがコシヒカリのおにぎりやお漬け物などでおもてなし



松之山地域各コースでは美人林へも



松之山地域留守磨では愛かぶとをかぶつてのバフォーマンスがお出迎え



美しい郷土の棚田保全に向けで

新潟県知事

泉田 裕彦

Message

この度は、10月16日、17日の両日に亘り、本県の十日町市において開催された第15回全国棚田（千枚田）サミットに、全国から1970名もの多数の御参加をいただき、心より御礼申し上げます。

この全国棚田サミットは、本県においては、平成10年に旧安塚町で開催されて以来、2回目の開催となります。この間、二度に亘る震災を経験し、これを乗り越えて本県で開催されましたことは、誠に感慨深いものがあります。

特に被災の中心地は中山間地域であり、棚田も大きな被害を受けましたが、皆様方からいただきました温かい御支援により、復旧・復興が大きく進んだことに心より感謝を申し上げます。

さて、近年、棚田の織りなす造形美が人々の心を捉え、日本を代表する原風景の一つとして認識されてきております。その魅力は、今年のNHK大河ドラマ「天地人」のオープニングテーマの中で、十日町市松代地区の「星崎の棚田」が放映され、広く全国に紹

介されたところです。

しかしながら、その一方で、大きな弾みになるものと考へ化や後継者不足により、その維持・保全が困難となつてきていました。

この度は、10月16日、17日の両日に亘り、本県の十日町市において開催された第15回全国棚田（千枚田）サミットに、全国から1970名もの多数の御参加をいただき、心より御礼申し上げます。

この全国棚田サミットは、本県においては、平成10年に旧安塚町で開催されて以来、2回目の開催となります。この間、二度に亘る震災を経験し、これを乗り越えて本県で開催されましたことは、誠に感慨深いものがあります。



は、誠に意義深く、棚田を守つていく取組を進めていく上で、大きな弾みになるものと考へ化や後継者不足により、その維持・保全が困難となつてきていました。

本県における棚田保全の取組といたしましては、平成11年に棚田保全を支援するため、県農地部職員を中心としたECHO棚田サポートを発足し、農家の皆さんとともに農道や水路の草刈り、補修作業など、棚田の保全活動を行つてまいりました。

また、新たな取組として、県がコーディネーター役となつて、一般企業の参画を得て農作業を行う、CSRによる棚田保全を本年度から開始したところです。

今後も引き続き、今回のサミットで皆様方からいただいた貴重な御意見を参考にさせて頂きながら、本県の棚田地域の振興に向け、積極的に取り組んでまいりたいと考えております。

このよう中、「未来へつなげ美しい郷土を棚田からのメッセージ」をテーマに今回のサミットが開催されましたこと

ます。

最後になりましたが、今後とも皆様方の御支援、御協力をお願い申し上げますとともに、ますますの御発展、御活躍をお祈りいたします。

第15回全国棚田(千枚田)サミット

新潟県十日町市で2009年10月16、17日に開催!!



多くの参加者とすばらしい秋空に恵まれて、第15回全国棚田(千枚田)サミットを10月16日・17日に新潟県十日町市で開催いたしました。

今回のサミットは、「未来へつなげ美しい郷土を～棚田から～」を開催テーマとし、全国からは1970

未来へつなげ美しい郷土を

実行委員会から

サミット実行委員会事務局 十日町市農林課 南雲 晃



人の皆様に参加いただきました。

開会式会場の松代総合体育馆では、松代小学校の児童による「棚田へ行こう」の合唱に始まり、開会式のあと富山大学の酒井富夫先生による基調講演、「効率になじまない棚田を守るには、山村の人々が思想や生き方を発信し、多様な人々と協力することが必要」と、先生は述べておられました。

続いて、棚田見学会では4か所の現地で関係集落の人たちと交流を図っていました。ながら、参加者からは棚田の溜池などには絶滅危惧種の水生昆虫が当たり前にいる十日町市の「雪国の棚田」を堪能していただいたと思っております。

夕方からは、750人が一堂に会しての全体交流会。魚沼産コシヒカリの新米おにぎりや米粉料理など、地域食と土着の民芸を交えながら情報交換・交流を行つてもらいました。

2日目は、会場を市の中央部に移して分科会。テーマは「みんなで支える棚田の農業」・「スローライフと棚田のつながり」など5つで、いずれも熱心な議論をしていただきました。そのあと松里小学校児童と森の学校キヨロコからの事例発表、そして地域代表による共同宣言。最後に実行委員会長の関口十日町市長が締めくくり2日間のサミットを終了しました。

ご支援・ご協力頂きました多くの皆様のおかげをもちまして、予定通りのサミット進行を行うことができました。大変ありがとうございました。

中山間地域の生き方とは、「自然体」で地域に暮らす人々を大事にするといった互いに生きていくことを大切にする価値観だと話す。これからは、中山間地域のように多様な担い手を認めながら、ムラを強化し、地域連携型経営体などを立ち上げていくやり方の重要性を説いた講演となつた。

「中山間地域の農業構造改革～もうひとつの農業を考える～」

基調講演



地域の自然と棚田の関わり

コーディネーター 三沢 真一

一様な整備ではなく、多様な整備をした方が様々な生き物の生息を可能にし、それがトキの生息できる環境づくりにつながるという報告がなされた。

地元川西の南雲敏夫氏からは、棚田は沢山の生き物がいるので、自然観察には最適の場であり、子ども達には自然観察を通じて棚田の大切さを理解してもらうようにしているという報告があった。

また同じく地元松之山の佐藤一善氏からは写真家の立場で、松之山の美しさは棚田とそれを取り囲むブナ林、雪、人の富みからなり、この美しい景観を未来永劫残してほしいという報告がなされた。

長野県の姨捨地区の棚田整備に係わってきた木村和弘氏からは姨捨地区で、水源林—溪流水—水路—棚田とつながる棚田ビオトープの実現を文化的景観保全計画を作成してめざしているという報告がなされた。

会場からも多くの意見が出され、活発な議論が行われたが、全体的には次のように集約できる。

第一分科会では5人の話題提供者があつた。まず地元の永野昌博氏より、新潟の地すべり地の棚田の特徴として冬に水を溜めることがあり、それが多様な生き物の生息環境を提供しているという紹介があつた。特に力エルを例に、棚田と周辺の様々な土地利用を生息場にして数種の力エルが棲み分けをしているという興味深い事例が話された。

佐渡でトキの生息環境のために棚田の再生に取り組んでいる中島明夫氏からは、

周囲の森林など自然の中に存在する棚田は景観的にも大変すばらしいものを持っている。

ただ整備が行われて、生き物が生息しにくい環境になつたり、景観的にもつまらなくなっている所がある。一方で棚田の厳しい条件から耕作放棄が進み、棚田が荒れてしまつた所も多い。棚田がなくなければ、それと同時に棚田が持つている

生物の生息環境や景観、それに水資源涵養や洪水抑制機能などのすべての機能が喪失してしまうので、棚田の維持がどうしても必要になる。それを防ぐ目的で、様々なボランティア活動が行われている事例の報告があつたが、過疎化がますます進行する中で、ボランティア活動を持続的に継続してゆくことの難しさを指摘する声もあつた。

このような状況下で棚田の維持を最も重要課題として位置づけするなら、作業性の良い大きい区画に整備して行くことが不可欠であるということになつた。ただ区画整理に当たつては、生態系や景観に最大限配慮した整備をする必要があり、地形を大きく変えることなく、等高線に添つた区画形状が望ましい。また棚田の景観の良さは曲線の畔にあるが、現在の農業機械では曲線の区画に対応可能ではないかなどといふことで、幅を一定にした曲線畔の区画を取り入れるべきという判断が示された。

劇—「宝用水物語」

事例発表 桧里小学校児童



みんなで支える棚田の農業

コーディネーター 堀口 健治

十日町市立松里小学校の5、6年生による劇「宝用水物語」が参加者を魅了した。約200年前につくられたという松里地区の「宝用水」。現地を調査したり、地域の人から話を聞くなどして、子どもたちでシナリオを作成したという。水不足に苦しむ農家が知恵を出し合い、いかにして勾配をつけながら水路を引くのかといった当時の土木技術なども具体的に描かれ、説得力のある劇となつた。

○コーディネーター

堀口健治氏(早稲田大学副総長・政治経済学術院教授)

○話題提供者

山岸公男氏(十日町市/星崎区長・星崎区直接支払代表)

阿部三代繼氏(十日町市/地元の棚田農業実践者)

岩野行孝氏(上越市/棚田フットワーク代表)

前浜隆広氏(大阪府/アストラゼネカ株式会社 CSRマネジメント部長)

植木祐太氏・行本篤生氏(東京都/早稲田大学法学院2年)



1. 棚田に風が吹いている

棚田について多くの国民が関心を向け、その美しさは写真家にとって大事な被写体になつてゐる。

田植え、稻刈りの時期には、農業用車両が通行に困るほど、棚田を見下ろす道筋に多くの人が駐車している。農業が正常に行われていることが、棚田の景観を守る

6人の話題提供者をもとに、フロアから意見発表を求め、議論を盛んにした。そこで明らかになつたことは以下の3点である。

2. 地域の担い手の確保は困難

だが、棚田農業を中心的に支え集落に居を構える若手・中堅は少ないし、後継者と目される人の帰農や帰村を期待することが難しい。限界集落の村人との交流が社会認識の深まりや価値観の広がりに大いに役立つたと率直な感想を述べる若者に、会場からそれなら定住するかといったきつい質問もなされた。

並みの所得が確保できる就業先がないため若手・中堅は参入せず、現実は65歳以上の、もともとそれしか選択の機会が無かつた農民に地域農業の多くを依存していく、この世代がリタイアした時は、すべてが耕作放棄地になる恐れが強い。

農業・農村は広い意味での教育の場にならうつるのである。

3. 条件不利の格差是正の仕組み

平地の農業でも存続に苦労しているときに、中山間の農業はより一層の「コスト高で苦労する現実がある。その中で2000年から始まつた中山間直接支払い制度の一層の充実が求められた。政権を握つた民主党はマニフェストで、中山間直接支払いを恒久法として法律化すると述べ、予算による5年毎の任期的な事業という従来の制度を抜本的に直すとしている。さらには、生産費と価格との差額を所得補償するとの公約で、「コストの掛かる棚田農業にとってよい提案となつていい。環境税も含め、国土保全、環境の維持を目的にした公的な支援があれば、棚田を吹く新しい風に乗つて具体化する立的な取り組みがより広範に深く展開する」となると期待したい。



棚田と地域振興の取り組み

コーディネーター 伊藤 忠雄

この分科会のテーマは「棚田と地域振興の取り組み」についてである。棚田の魅力をどう引き出し、それを地域振興へどのようにつなげていくかが課題である。パネラーは、新潟県の典型的な棚田地域に生活する5名の方であった。

はじめに、「コーディネーターから分科会のテーマの解説として、「棚田」が提起している地域振興に関する幾つかのヒントを新潟県内の事例から紹介したのち、棚田地域の魅力を狭義の農業だけに限定せず、農村空間や伝統文化、癒し・健康などという幅広い「メイン」として捉えていくことが必要ではないかと提起した。まず、各氏から出された棚田（地域）の魅力については、「暮らしてみたら魔法の里」のような奥深い抱擁力と癒しの力（鶴田豊子氏）、豊かな自然の恵みとそれ

○コーディネーター

伊藤忠雄氏（新潟大学農学部教授／農学博士）

○話題提供者

小林美佐子氏（財団法人 雪だるま財団事務局 越後田舎体験推進協議会事務局長）

鶴田豊子氏（里のめぐみ案内人・山彦インストラクター・なりわいの匠・自然案内人）

村山達三氏（（有）東部タクシー代表取締役社長・にいがた観光カリスマ）

山岸洋貴氏（「森の学校」キヨロ口農水資源プロジェクト研究員）

山田正一郎氏（東田尻集落協定策定委員会代表・農業グループ山美しの小作人）

に付き合つ達人の存在（山岸洋貴氏）、手つかずの日本の原風景（村山達三氏）などが指摘された。

次に、これらを活かした地域振興の取り組みとしては、友人・知人への「松之山だより」の発信（通巻第1~26号）を通じた交流の場の提供と輪の拡大（豊田氏）、「大地の芸術祭」で集落に来た芸術家との交流を通じた棚田オーナーの取り組み（山田正一郎氏）、地元旅行会社と連携した棚田ガイドの商品化（山岸氏）、温泉客などを対象とした観光タクシーによる棚田地域ガイド（村山氏）などが紹介された。

とりわけ、「越後田舎体験推進事業」の紹介は、こうした取り組みが棚田地域の重要産業として成長できる可能性を示唆された（小林美佐子氏）。この事業は、平成10年度より実施されている都会の中・高等学校の生徒を対象としたもので、過疎・高齢化の先進地であった山間の旧東頸城郡6町村が地域の生き残りをかけて取り組んできた事業である（現在、上越市、十日町市管内の10市町村）。

子供たちを対象にした「ほんもの」体験型観光を提供することで、その経済効果は現在1億円を越えているという。同時に、子供の受け入れを通して地域の高齢者が元気と明るさを取り戻す効果も指摘された。

こうした各氏からの実践的な報告を受けた後、棚田を地域振興に結びつけるた

めの視点等について意見交換をし、今後の施策等への提言をいただいた。これらを通じて明らかにされたことは、現在各地で芽生えつつある棚田を守る取り組みや様々な人の動きを「つなぐ」ことである。このため、インストラクターなどをさらに発掘するとともに、それを結ぶネットワークの構築が必要になってきたことが指摘された。しかし、その前提として棚田や集落機能などが今後とも維持されるために、集落間連携などの持続的な仕組みがきわめて重要な課題であることが明らかにされた。



「雪が育む十日町市の棚田 ～カエルの視点で考える 棚田のこれから～」

十日町市立里山科学館「森の学校」キヨロ口 学芸員
永野昌博・山岸洋貴

十日町市の棚田の特徴の一つは、棚田の研究機関があることです。その研究機関は、十日町市立里山科学館越後松之山「森の学校」キヨロ口という科学館で、ここでは地域住民と都市住民を巻き込みながら研究を進め、その成果を地域づくりや棚田保全などに活用しています。

今回の第15回全国棚田（千枚田）サミットの事例発表では、キヨロ口の真骨頂である生き物研究の視点から十日町市の棚田の特徴を挙げました。それらは、

事例発表「森の学校」キヨロ口



第4分科会報告

スローライフと棚田のつながり

コーディネーター 酒井 富夫

ものを歯り起し、いつあることか、それに

代わるものを作り、ひとつで共通していた。

た」を感じてしまうところ

まつだら農舞ロコストリーン調理室の長
谷川鞠子さんは、「食は命の起源」だとし、

以下の通りです。①雪が多い、②森（ブナ林）に囲まれていて、③天水田（簡易灌漑施設のみ）が多い、④温水路や温水溜池などの雪解け水を温める仕組みがある、⑤高い土の畦、⑥秋に田搔き（代搔き）をする、⑦景観が美しい、⑧うま



の多面性は如何なく地域学会では、その多面的な価値観とは何かをまず話していただきたい。報告者は皆さんは古い

「食、土、それを耕す人、その人のつながりの原点としておらがある」と云ひ。交流の拠点として、いろいろを囲むコロニー二三ヶ所を開設し、外部の世界に対して風穴を開ける。古民家や田舎暮らしは、人類の遺伝子の「つむぎ」だとみる。古いものを捨てたら子供は育たない。中山間のこの地でこそ、「人と人のつながり方など、「現代人が忘れかけた生き方の基本を学ぶ場を提供できる」と主張する。エリミニアージアムを運営する農家の山田栄さんは、古代米、土着園など古いものへこだわり、大規模農業はむしろ無駄が多いとして、これから農業のあり方を訴える。加工などで食べていただける農業をめざしつつ、山間地の魅力を子供に教えていた。「小さくも多様な世界の大切

うだけでなく、遺伝子として自然循環の一員でもある。自然循環と市場経済の行き来によって、人間としてのバランスを保つことができる。多面的な価値観は自然循環のなかにあり、自覚的に追求しないと市場経済に流されるだけだ。しかし、それは力のかかることではない。ペンキさえあれば家は直せるし、家族やコミュニティなど当たり前のことを大事にすればよいのだ。多面的な価値観に立った産業や社会とは、自然、伝統、人のつながりの中に真実の価値を認め、それを味わえる生き方に基礎をおく産業や社会なのだ。今日の市場経済の大転換期においてこそ、この価値観を世界にアピールし人々の意識を変革できる。そこに地域再生の道筋が見える。

じじこじこでも沢山暮らしてることが何よりも素晴らしいことであると思われます。
⑪では、キヨロロの活動を通じ、十日町市の棚田のこれまでを紹介しました。キヨロロでは、棚田を未来へ繋げていくため、②棚田と教育を結ぶ活動、①棚田と研究を結ぶ活動、④棚田と地域づくりを結ぶ活動、⑤棚田とアートを結ぶ活動、⑥棚田と誇りを結ぶ活動、⑦棚田とビジネスを結ぶ活動、⑧棚田と観光を結ぶ活動などを展開しています。どれも始めて日が浅い活動ばかりですが、これらの活動が「にほんの里100」の入選に繋がりました。新たな棚田ビジネスを生み出そうとしています。これからも十日町市は棚田のいろいろな可能性にトライしながら、棚田と共に生きていきます。

○コーディネーター

酒井富夫氏(富山大学極東地域研究センター教授／農学博士)

○話題提供者

カール ベンクス氏

(建築デザイナー／カールベンクス アソシエイト(有)代表取締役)

富澤惠子氏(教員／十日町市立吉田小学校校長)

山田 栄氏(農業／桔木又エコ・ミュージアムの会)

長谷川繭氏

(調理師／まつだい農舞台レストラン「まつだい里山食堂」)

参加者たちの声 ～突撃レポート～

地元のおばちゃん

わたくしよりこの娘、撮ってやつて。
早稲田の学生さんが応援に来てくれたんよー。



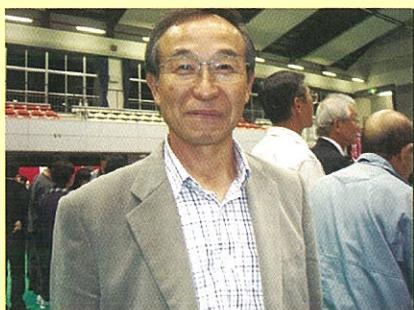
菜の花プロジェクトとは

早稲田大学の学生たち（「じょんのびクラブ」）が、集落の人たちとともに地域を活性化させようとしている。その集大成として2009年に耕作放棄地1.2haに菜の花を植えたプロジェクト。菜の花植えも地元に習い、ともに汗をかき、民泊もさせてもらうなど交流が深まった。学生は「つながり」を学び、地元には「つながり」を通じて「幸せ」を、という理念。2010年春、花が咲くのを地域の人とともに楽しみにしている。



かもう
蒲生の棚田で菜の花プロジェクトをアピールする早稲田大学の学生たち

リーダーの内藤貴浩さん：「早稲田大学の学生約30人で、集落のみなさんと一緒に活動をさせてもらっています。今日は授業もある日なので、8人だけでの参加です。蒲生の良さは、みなさん言葉には出さないけれど、背中で語る熱さがあること。一度団結すると大きいことができるんです」



第4回全国棚田サミット開催地の新潟県旧安塚町（現上越市）の当時の町担当者、保野良夫さん

「こうしてサミットで全国の棚田で暮らす人たちが同じ思いで集まるってことはすごいことだね。人間と人間だと感じるわね。懐かしい人に会うと、まるで棚田に行ったようだわ」



前夜祭会場にて。

2011年の棚田サミット開催地、徳島県上勝町長、笠松和市さん

「今回の棚田サミット、前日に越後妻有の大地の芸術作品の一部を御案内いただき前夜祭など地元関係者の暖かいおもてなしに感動いたしました。本町は人口2000人の彩り農業や全国初のゼロウエイスト宣言をしている小さな町です。持続可能な棚田集落を目指し内容の濃いサミットにしたいのでご指導下さい」

第2回全国棚田サミット開催地の佐賀県旧西有田町、当時の助役であり、現・有田町長、岩永正太さん

「1996年に第2回目の棚田サミットを開催し、みんなで声をあげて中山間地域直接支払制度の基礎をつくりました。毎年こうしてみんなが思いを持って集まってくれるのは力になります。小さな土地を守っていくのはたいへんな労力と時間がかかること。こうして支えてもらえるとありがたいです」



見学会にてシャッターをパシャリ。
棚田学会員でもある2人が会話中でした
右は京都から参加、学芸員の青山淳二さん

「十日町の棚田の感想？ 土はの棚田がステキですね。石垣はななめ下から見るのがいいが、土はの棚田は上から見るのがいいですね。朝霧や夕暮れの美しい棚田の写真をよく見ますが、昼間見てもきれいなものはきれいです」

左は東京から参加、ふるさときゃらばんのひらつか順子さん

「青山さんはどこへでも雪駄を履いて現れる。今回はクロックスを気どって、黒のサングラス。稻刈りが終わった棚田には水が張られてきらめいていた。魚沼三山の山並みを映すが如く厳しく美しい越後の世界だった」



ご夫婦で参加される方も！
棚田オーナーで神奈川県在住の
お2人

久野大輔さん：「サミット参加は2回目。きっかけは、棚田で田植えがしたくてインターネットで調べて、近くで静岡県松崎町の棚田オーナーになったことです。それで、NPO棚田ネットワークにも入って。来年の棚田サミットは松崎町ですね。何かお手伝いできることがあればと思っています」

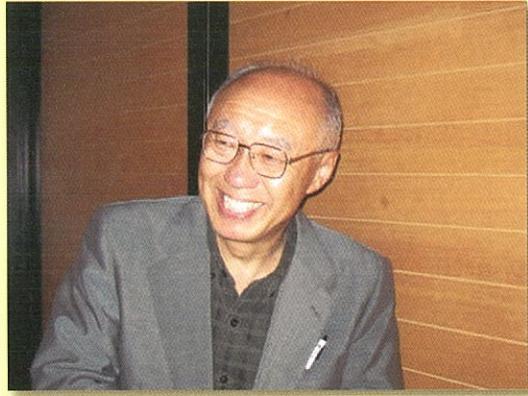
久野実和さん：「わたしは初めてのサミット参加です。棚田にかかわりはじめて2年目ですが、いろいろなところに行けて、いろいろな方と交流ができるのが魅力ですね。そのために来ているかなあ。ちょっとずつ知った顔が増えるのがうれしいです」



新潟県柏崎市在住の農家、
連絡協議会の個人賛助会員でもある
竹内吉一さん

「柏崎で、『週末米つくり隊』という仕組みをつくりました。棚田保全と自給に挑む都市住民による農業です。現在、4地区に分かれて18組が、自分の受け持つ小さな田んぼで、自分の休日に合わせて米づくりをやって、みんなうまくいっています」

*竹内さんの取り組みはHP「柏崎の棚田＆駅・まち」をご覧ください(<http://www.tanada-eki.com/>)。



全体交流会で
ステキな女性を見つけました！
アストラゼネカ株式会社 広報部
小野亜希子さん

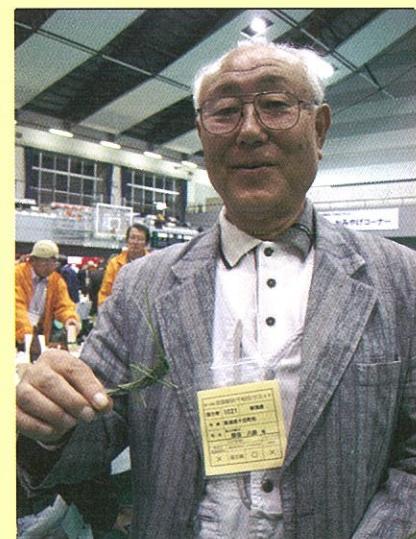
「わたくしでもアストラゼネカの社員が、『高齢化する村を応援するプロジェクト』でお世話になっております。棚田サミットには第12回目の日南市から参加させていただいていますが、棚田を守るみなさんのパワーを感じます」



来年棚田サミット開催予定地の
静岡県松崎町石部の棚田保存会
会長 高橋周蔵さん

「いま閉会式も終わって、来年
がいよいよだなあと実感して
います。良いサミットでした。
勉強になりました。最後まで、
棚田保全が必要という熱い想
いを持つ人が残らっていて
……。こうした想いを共有する
人が若い人からもっと出て
こないといけないですね。若い
人が定住できる地域づくりを
していかなければと思います」

みなさまご協力ありがとうございました。



茅でバッタを折る
名人！
十日町市松代在住の
関谷八郎さん

「松代の地域応援団『案
山子隊』のOBです。い
ろいろな土地の人たち
が、お互いに持っている
棚田や千枚田という
共通点で出会うのはす
ばらしい。長崎にもあ
るとは思わなかった。
交流して話してみなき
やわからないね」

*手元には手製のバッタ！ 本物と見まごうばかり

「棚田と震災復興の取り組み」について

コーディネーター 金子 洋二



今回の全国棚田サミットは、新潟県中越地震からまる5年の節目に、まさにその中越で開催された。最大震度7という未曾有の地震は、死者68人、建物16万棟、そして150.3haの農地（被害額156億円）といふとてつもない被害をもたらした。被災地の多くは中山間地にあたり、新潟が誇るブランド米の棚田も無残に崩された。そして5年、農地は数々の苦難を

乗り越えて復旧されたが、この地震が地域にもたらしたのは単なる破壊と復旧の記憶だけではない。むしろ重要なのは、中山間地の暮らしと人の絆の大切さを、被災体験やその後の復興への歩みを通して、強烈なインパクトをもって再確認させられたことではないだろうか。この分科会では、地震を乗り越えて地域を元気にしようとした5人のリーダーがそれぞれの取り組みを紹介してくれた。

五藤忠雄さんは愛知県の出身。震災の直後にボランティアとして小千谷市に入り、耕作放棄されそうになっていた棚田を放つておかげで引っこ抜いてきた。「小千谷市の棚田を守る会」を立ち上げ、現在の耕作面積は8反。長続きする仕組みをつくりつつ、どんどん広げていきたい

○コーディネーター

金子洋二氏（新潟NPO協会副代表理事）

○話題提供者

五藤忠雄氏（小千谷市の棚田を守る会会長）

田中 仁氏（やまこし「三人娘」コシヒカリ生産組合代表）

平澤勝幸氏（越後川口木沢地区棚田保全協議会代表）

水落静子氏（東下組おんなしょの会代表）

山本浩史氏（十日町市地域おこし実行委員会代表）

田中仁さんは旧山古志村で被災。中尾三工、伊藤ゆかり、園まりの三人を看板に「三人娘」というブランドをつくり、米の植酸栽培に取り組む。高齢化率42%の村で新しいビジネススタイルの確立を目指している。

平澤勝幸さんは震源地・川口町の木沢集落で棚田オーナー制度を立ち上げた。今年は首都圏を中心に16組が参加し、年間500人もの来訪者と交流を行っている。水落静子さんは十日町市でも被害の大

きな下条に暮らす。3年に一度行われる「大地の芸術祭」で、震災復興の象徴とも言われる作品「うぶすな家の運営に携わることになり、地元の主婦らと「東下組おんなしょの会」を立ち上げ、観光客らに手作りの郷土料理を提供している。

山本浩史さんは「十日町市地域おこし実行委員会」の会長を務め、山奥の6世帯しかいない池谷集落を舞台に、集落の存続をかけた地域おこしに挑んでいる。この5年間で県内外の多くの市民団体・企業と連携し、人の交流や米の直販事業を軌道に載せつづける。

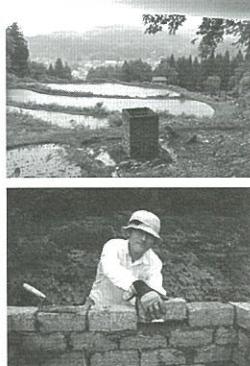
彼らが共通して感じているのは、震災という共通体験が住民の意識を変えたこと、そして外部との交流をコーディネートし、受け入れる体制作りの重要性だ。阪神淡路大震災の後、被災地ではボランティアや市民団体が活躍し、市民パワーの重要性を全国に知らしめたところから日本におけるNPOの議論が高まり、法制定や市民活動の活性化の原動力となつたことが知られている。いわゆる「復興バネ（災害によるダメージを覆し、新たなパワーを生み出す）」が働いたのだ。それならば、中越における復興バネは、資源と可能性と人の温もりにあふれた中山間地の復権そのものになるはずである。この分科会での議論を通じ、強く感じたことである。

「農」と「芸術」の融合をテーマに土に還るアートとして、棚田の土と藁で作った日干しレンガを積重ね、やがて朽ちたレンガからその土地の植物が芽吹き大きくなる姿を見る作品である。以下、作品の解説。恩師である進士五十八先生（東京農業大学教授・前学長）は、まちづくりにおいて、「農」の思想に基づくデザインが必要であると主張している。「農」のデザインは、地域で

大地の芸術祭開催地

後妻有アートトリニティ2009
に出展して

岐阜県立国際園芸アカデミー
NPO法人棚田ネットワーク
相田 明



第15回 全国棚田(千枚田)サミット首長会議

コーディネーター 中島 峰広
(棚田学会会長／早稲田大学名誉教授)



第1の政府の助成金については、今年度第一次の最終を迎える中山間地域等直接支払制度、3年目の農地・水・環境保全向上対策事業、民主党が新しく創設しようととしている戸別所得補償などが問題にされた。まず、注目される中山間地域等直接支払制度は、総会に出席した農水省中山間地域振興課長の「概算要求に上げた」という報告、棚田学会の会員である民主党初代の次の内閣・農林水産大臣であった篠原孝議員の「環境支払の一つとして実施する」という応答、会議のオブザーバーとして参加した本府から徳島県農林水産部農山村政策局に転出している日置秀彦氏の農水省の最新情報などから第三次が実施されることは間違いないと判断された。

事業なれば農地・水・環境保全向上対策は、制度上中山間地域等直接支払制度と併存して受けられる仕組みになつてゐるにも拘わらずその事例が少ないという報告があった。これは、両者の施策の一つである農業者以外も含む共同活動が同じメニューになるためであり、向上対策のための新たなメニューをつくりだす工夫が必要という指摘があった。

前回の長崎・雲仙サミットについて、行政の長である首長が一堂に会する2回目の会議が十日町でも開かれた。会議では、①政府の助成、②棚田サミットの今後の展開、③中山間地域の活性化の3つのテーマで議論が行われた。

新設の農業者戸別所得補償は、民主党のマニフェストによれば生産数量内で米の生産を行う販売農家のみを対象とし、全国平均の生産費から全国平均の販売価格を控除した差額を補償するとしている。

今後の課題としては、それぞれの問題について専門家を招いて意見を聞き議論を深めることや茂木サミットで示された懲罰対策のような政策提言を行つ必要があることなどが話題にされた。

それゆえ、棚田地域の農家にとっては、全国平均の生産費よりはるかに高い生産費を要し、しかも対象外の自給農家が多いことなどから新制度の恩恵は少ないと考えられる。したがって、環境支払という観点からの中山間地域等直接支払制度の一層の強化を要求すべきであるという意見が大勢を占めた。

第2のサミットの今後については、第2回サミット開催地の有田町長からサミットでの決議・行動が中山間地域等直接支払制度を生んだ経緯の説明があり、今後とも継続発展させる必要があるという主張がなされた。また、雲仙市から合併後、全体でサミットを実施したことにより、行政の一体化が図れたという開催を評価する発言があった。

第3の活性化については、過疎・高齢化の一層の進展により、棚田の耕作・保全にかかる担い手の確保が急務となつてゐることから、その対策として都市部のマンションオーナーをターゲットにしてしまふことから、その対策として都市部のマンションオーナーをターゲットにした棚田オーナー制の展開、韓国の一村一社運動のような企業のCSRや私学財団から助成金をえた大学生のボランティア活動の事例などが紹介された。

伊勢神宮の式年遷宮が、20年に一度神宮の建物を新しく建て直すように、この作品も3年に一度(トリエンナーレ)再生し、世襲(セクセッショナル・遷移)できればと思つ。

れた材料を使い(地場材)、人間の尺度(ヒューマンスケール)でつくられる。だから、人間と自然が上手く折り合ひをつける「デザイン」であり、環境に対する負担が少ない。その一方で、海外に日本文化を紹介するとき、庭園は誇るべき存在である。私は造園を専門とする立場から、15年間、棚田景観の保全活動をしつつ、ずっと「農」と「芸術」の融合を夢想してきた。

前夜祭

小さな前夜祭——棚田の里まつだい「宵の集い」

全国棚田(千枚田)連絡協議会個人正会員

木戸 幸子

今年の全国棚田サミットは私の故郷で開催されることになり、2年前から実行委員の一人として関わらせて頂きました。関係者みんなの願いが届き、この季節にはないような暖かい青空のもと、多数の方々にご参加頂き無事に終了することができ、安堵しているところです。

私は、毎年棚田サミットへの参加を心待ちにしている一人ですが、今年ばかり

は様子が違いました。過去の開催地の皆さんのがどれほど大変な準備をされて当日を迎えていたかをしっかりと知る機会になりました。来年の松崎町サミットには心を入れ替えて行かなければと思つています。

小さな前夜祭 「宵の集い」

10月15日、14時集合、①城山エリア散策—越後妻有トリエンナーレ「大地の芸術祭」アート作品鑑賞(案山子隊ガイド)。②松代資料館見学。③まつだい農舞台レストランで交流会——会費2000円、盆踊り「三イヤサー」でお開き、20時30分。

上：まつだい農舞台で案山子隊のメンバー。バックには大地の芸術祭アート作品が。

中：資料館見学 下：農舞台レストランでの交流会

開会式、棚田見学(星崎、蒲生)の会場になった松代地域は、棚田に囲まれた地域ですが、ある時、この松代の友人たちから「棚田サミットに遠方からお出になつて泊まれる皆さんをお持て成ししたい」という声が上がりました。それは、私も毎年各開催地におじゃまして思うことなのですが、その地域の一人でも多くの方々とお話がしたい、もっと地域のことを探りたいと何時も欲張つてしまいます。そんな私のような思いの参加者にも喜んで頂けるのではないかと話が纏まり「宵の集い」を開催することになりました。松代地域の有志で活動している地域応援団「案山子隊」が中心になり、スケ

ジユールが決まりました。
他の方々から「参加頂き、和やかな「宵の集い」になりました。特に交流会の料理は、農舞台の長谷川繭さんが地元の食材で趣向を凝らし、オシャレな料理に。そして「案山子隊」女性部の笑さん、ハル工さんは、翌日の全体交流会のメニューと重ならないようにと事前に情報を入手して昔ながらの郷土料理を用意してくれました。みんなが無理をせずに楽しくできることを持ち寄った手作り「宵の集い」は、参加された方々から「よかつた、楽しめた」と感想を頂き、そして「案山子隊」女性部からは、「サミット開催地のお役に立て嬉しかった」と。中には「木戸さんのサミット病が移っちゃったね」と仲間うちでボソボソいう声も聞こえてきました。地元の皆さんも少し遠いところもあった棚田サミットがググッと近づいた開会式前夜のひと時になりました。最後に全国棚田(千枚田)連絡協議会から個人会員活動費の助成を頂き、大変助かりました。ありがとうございました。

会場展示・周辺イベント



まつだいのサミット会場には、棚田学会のメンバーによる棚田の写真・絵画が数多く展示されたほか、地元写真家の棚田写真、また小学生による棚田の絵も数多く展示され、会場を盛り上げていた。2日目は会場が十日町市中央部へと移動したため、見損ねた人もいたのが残念

十日町市立里山科学館「森の学校」キヨロ口では「越後妻有の棚田展」を10/10~11/29まで同時開催。松之山見学コースでは立ち寄った。写真右は同キヨロ口にて9/19~11/8まで開催の「民俗の風景『中越の棚田展』」。酒井英次氏の棚田の絵(日本画)14点が展示(右写真:今井英輔氏提供)

全国棚田（千枚田）サミットの国際化に向けて

全国棚田連絡協議会 個人正会員
安井 一臣

今年の全国棚田サミットへも、**金泰坤**
氏（韓国棚田研究会・会長）の引率で、
韓国の棚田4地域（南海郡加川、虹峴、

キム・テクン

尚州、虹峴）から13名（内、女性5名）
の参加があった。韓国からの参加は、昨
年の長崎・雲仙サミットから始まったが、
昨年の6名からの倍増である。この種の
催しに農村女性が外国まで出かける機会
は、韓国では特筆すべきことであるとい
う。一行は、10月15日の深夜に十日町市
松代の宿舎・松和荘に到着。16日の午前

中、上越市安塚区細野集落を訪問して中
山間棚田地域の活性化につき研修。午後
からサミット参加。17日の午前中、日本
で学んだことの整理ミーティング。午後、
新潟市へ移動。18日朝の便で帰国とい
う慌ただしい日程であったが、金泰坤氏か
らは「韓国の農業事情は日本のそれとよ
く似ているので学ぶことが多かった。大き
きな刺激も受けた。今回学んだことを、

韓国棚田地域の活性化に大いに活用したい。
韓国棚田交流が進むことも願つてい
る」というコメントがあった。

外国からの参加者を迎えるにあたって
は、常に言葉の問題がつきまとう。幸い
地域には韓国から松代の農家に嫁ぎ、韓
国食堂を営んでおられる山賀良子さんの
支援を受けることができた。山賀さんは
宿舎の松和荘へ2晩にわたり大量の韓國
料理を差し入れしてくださいました。彼女も
久しぶりに韓国語を話す機会に恵まれて
嬉しそうで、連日深夜まで話が弾んだ。

鳩山首相が提唱する東アジア構想の

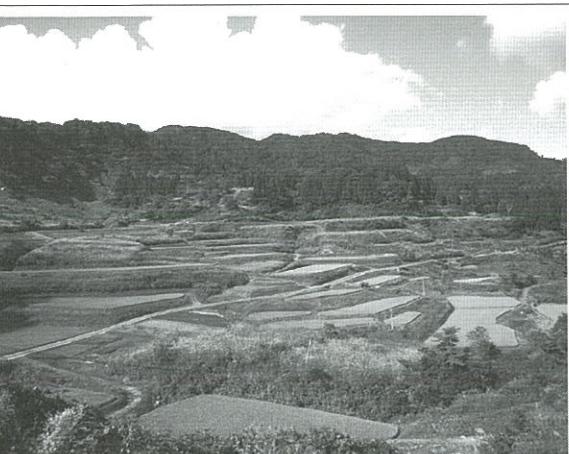
国々は、モンスーン・アジア稻作地域と
よく一致する。21世紀の世界共通のキー
ワードは「持続可能な社会」である。そ
のような社会状況下にあって、モンスー
ン・アジア地域の長年月にわたる水田稻
作は、持続可能な社会のシンボルと言え
るのではないか。共通する課題も多いこ
とと想定されるので、これからサミッ
トには、アジア各国の棚田地域からの参
加が大きな意味を持つように思う。日本
の棚田地域には、韓国のみならず、中国、
フィリピンなど東アジアの国々から嫁い
できている人も多いと聞く。このような
人たちと外国からのサミット参加者の交
流も、持続可能な社会の構築への一里塚
になるものと確信する。今後のサミット
に期待したい。

今回の韓国からの参加者受け入れには、
サミット実行委員会をはじめ、中島隆広
棚田学会長、木戸幸子サミット開催地選
定特別委員、その他多くの関係者にお世
話になつた。受け入れ窓口の一人として、
心から感謝申し上げる。



安井一臣さん

十日町市の棚田はほかにも



土倉の棚田（中里地区）



大白倉の棚田（川西地区）



三ツ山の棚田（十日町地区）

新しく自治体会員が増えました

全国棚田(千枚田)連絡協議会の自治体会員は現在57市町村です。棚田の保全・利活用、また中山間地域の活性化を目指しています。

愛媛県松野町——奥内の棚田

水流れきて流れゆく田打かな 芝不器男

愛媛県南西部の山峡の町「松野町」。

98・5 km²の面積の内、約84%を山に囲まれております。「森の国」と呼ばれています。こうした地勢のため、山深い所に田畠が多く、奥内の棚田がその象徴として挙げられます。

奥内の棚田は、面積14ha、筆数300枚、平均勾配7分の1、対象農家は26戸となっています。平成11年7月26日に棚田百選の認定を受けてから約10年、現在も景観に配慮した営農活動が続けられています。

この棚田は、文治元年(1185年)壇ノ浦の戦いに敗れ、源氏の追っ手から逃げ延びた3人の武将(平家の落人)が入植し、棚田を造ったと言い伝えられています。石垣は、大きな石を1個1個丁寧に積み上げ造られており、そのすばらしい技術により、現在まで崩壊することなく、棚田の景観を保っています。また、四季折々の姿は美しい、春月と棚田、ホタルと棚田、収穫時期の黄金と棚田、雪と棚田等訪れる時期により、その一瞬でしか観ることができない貴重な時間を楽しませてくれます。

地区内にはこの他にも、弘法大師の伝説が残る「逆杖のイ



チヨウ」(愛媛県指定天然記念物)、また、その周辺では、四季折々に美しい姿を見せてくれる「天ヶ瀧」があり、歴史・文化・自然があふれています。この美しの郷「奥内」では、地域の魅力を自分自身で感じるとともに、地元小学生の総合学習等、後世に伝えていく活動も展開し

ています。
冒頭の俳句は松野町出身の俳人芝不器男(1903~1930)の俳句です。清らかな水の流れと田打、まさにこの「奥内の棚田」の情景と一致する秀句です。芝不器男は、大正から昭和にかけて俳壇を彗星のごとく駆け抜けました。この短い生

涯の中でも、多くの秀句を残します。この望郷、故郷を愛する心情が、今を生きる奥内の人たちにも受け継がれ、今後も「棚田」の魅力を発信していくでしょう。

(愛媛県松野町 産業振興課)

■棚田学会10周年記念誌『ニッポンの棚田』



棚田学会が、10周年を記念して棚田にかかる人々(学会員)90人から、地域の棚田保全の取り組みや棚田研究、また棚田への思い、写真などを集めた1冊。全国にさまざまな会員を持つ棚田学会ゆえに、多様な棚田像が語られ、全体を通して、ニッポンの棚田の現在が見えてくるものに仕上がっている。2009年7月発行 A4版144ページ(カラーフロントカバー)、53点の棚田写真掲載)。1冊2000円(税込・送料別)一般の書店では売られていないため、棚田学会事務局(ふるさとぎやらばん内)へ直接購入申し込みを。電話:042-381-6721



お便り テラス

小さな山里の大きな自信

今月の8月下旬の出来事で恐縮ですが、山里で暮らす80世帯、約260人が初めて協力して事に当たるとの素晴らしい経験が生まれました。

普段それが当たり前と思っていた景色の価値などに改めて気付き、大きな自信になつたところです。

その集落は、新潟県柏崎市の西部、日本海から4km近くのところにある「水源の郷谷根」。

谷根(たんね)は柏崎市で標高

が一番高い信仰の山「米山(よねやま)」の麓、

文庫などおり狭い谷間の根源にあります。集落の

上流にはふたつの上水道専用ダムがあり、9万

余の柏崎市民に飲料水を供給しています。人家

と田んぼ(棚田)は、谷底を流れる清流谷根川

に沿う形で両側の山裾にあり、川にはカジカガ

エルや岩魚、山女、鱥などが棲んでいます。

首都圏で暮らす人たちの心を揺さぶった、谷

根の美しい情景と珍しい生き物たち。

谷根のやうした豊かな自然に出会い感動した

女子美術大学(神奈川県相模原市)の先生が、

谷根にある小学校(全校児童8人が来春)に海辺

近くの学校と統合し無くなるといつ話を聞き、

子どもたちに良い思い出をたくさん持つてもらおうと、「小さな谷根の豊かな生き物」を「ンセ

ブト」にした光アートイベント「たんねのおかり」

を企画提案したことに端を発した取組みでした。

「美しい景色、大好きな景色は美しいいい記憶をつくり、いい記憶は次のいい景色を創り出してくれる」。女子美大の先生は、挨拶の中で

「たんねのおかり」会場は、谷根川の中、川

の両岸の道端、はさ木、道祖神、そして来春統

めた頃、会場に置かれた様々なオブジェの柔らかな火が鮮やかに輝きました。8人の子どもたちが名付けたドゥイ生け物「たんねツシ」が、カワントウを含む校舎の体育館の壁面いっぱいに現れました。大きくて優しく

の間に背中に乗せて連れて行ってくれるといふ、なんともロマンに満ちた生き物です。

内発力の高まりで、異なる地域活性化を目指して棚田に明かりを灯すイベントなどが全国的に広がっていますが、この取組みは女子

美大の先生と学生に負ふさった愛身の格好で始まりました。集落外の人たちを呼び寄せるような取組み経験がなく、光のアートで子どもたちに良い思い出を」と先生が言われても、なかなかイメージが湧かない中でのスタートでした。

しかし会合を重ねてじゅうぶんに、これは使えないとアートの素材になりそうな古い農具や

民具、孟宗竹などを持寄り、集落外から人が来

るかもしれない、あかりの灯る農道や集落を

巡るのだから車は止めよう、それにはキチンと

許可を取らなくちゃ、集落入り口に駐車場所も

用意しなければ、川魚を焼いて振舞おうか、採

りたてのキウリに生味噌を付けて食べてもらおう、それなら野菜も売ろう、スタッフと同じ

ティー・シャツも売ろう、そこに書くキヤッチ

フレーズは話しかける意味合いで「あのねたんね いいね」にしよう……話も気持ちもだんだん盛り上がっていました。

そして、大した宣伝もしないのに一千人を超える人たちが訪れ、お越し頂いた人たちの共通語は「ワーッ綺麗!」「すてきー!」「美しいね!」、「谷根って素晴らしいよ!」

棚田サミットのテーマソング

「棚田へ行こう」も富崎県口南市

から栃木県茂木町、長崎市と雲仙

市、そして十日町の子どもたちへ

と歌い継がれ、へ棚田のテーマソ

ングとしてすっかり定着した感

じがいたします。

サミットの開催にあたり、ご尽力

と心温まるおもてなしをいただ

きました十日町市の職員、団体、

住民の皆様に心よりお礼申し上げ

ます。

参加された皆様もたいへんお疲

れ様でした。来年の静岡県松崎町

への参加もよろしくお願いいた

ります。

新しく会員になったみなさま

<自治体正会員> 島根県 奥出雲町

<個人賛助会員> 堀田 恭子(東京都)

<個人賛助会員> 侯野 良夫(新潟県)

協議会の理事会および総会を開催

いたしました。ご参集いただいた

会員の皆様、誠にありがとうございました。

いたしました。

再来年の第17回(2011年)

につきまして、今年1月に要望書

が提出され、2月の理事会で承認

されていた徳島県上勝町での開催

が、このたび正式に決定いたしました。

去る10月16・17日、新潟県十日

町市で開催された第15回全国棚田

(千枚田)サミットに、全国棚田(千

枚田)連絡協議会会長である雲仙

市長とともに参加してきました。

当日は天候にも恵まれ、大河ド

ラマ「天地人」のオープニングに登

場した星峰の棚田もゆっくりと見

学することができ、その中で昨年

の長崎市・雲仙市のサミットにも

ご参加いただいた方々とも少しで

すがお話しすることができます。

棚田サミットのテーマソング

「棚田へ行こう」も富崎県口南市

から栃木県茂木町、長崎市と雲仙

市、そして十日町の子どもたちへ

と歌い継がれ、へ棚田のテーマソ

ングとしてすっかり定着した感

じがいたします。

和歌山県有田川町での第19回

の開催は昨年決定済みですが、第

18回目につきましては未だ決定し

ておらず、中島峰広先生ほかサミ

ット開催地選定委員の皆さんにて反

力をいただいているところです。

第18回の開催地が決定した場合

は、その自治体の首長様に協議会

の理事になつていただくのが慣例

ですが、現在理事の数が会則の定

数である20名いっぽいであり、こ

のままでは入れる枠がありません。

兼ねてよりご指摘をいただいて

おりましたこの件につきまして、

役員を対象としたアンケートを行

い、今後の役員の選出方法につい

てのお考えをとりまとめたところ、

「定数を変更すべき」よりも「定

数はそのままに理事の選出方法を

変更すべき」というご意見が多数

でしたので、役員の定数は変更す

べき」というご意見が多数

でしたので、役員の定数は変更す

</



第16回全国棚田サミット 来年は静岡県松崎町へ

平成22年10月22日、23日の2日間にわたり第16回全国棚田(千枚田)サミットが開催される静岡県松崎町は、伊豆半島西南部に位置し、海、山、川の恵まれた自然環境や歴史的な建造物であるなまこ壁の建物が残る自然と歴史、文化の薫る町です。

市街地から6kmほど離れた石部(いしづ)地区にあり、静岡県棚田等十選地区に認定されている「石部の棚田」は、江戸時代にさかのぼり、文政年間の山津波による崩壊、その後20年間年貢が免除され復元したと伝えられている先人の努力や苦労が偲ばれる棚田です。

平成11年度から歴史的遺産でもあり富士山や南アルプスを望む素晴らしい自然景観を持つ棚田を、将来に残すべき貴重な地域資源として、地区を中心に保全活動が始まり、これまで4.2haが復元されています。また、平成14年度からは、静岡県で初となる棚田オーナー制度を導入し、現在1.6ha余りの水田で105組のオーナーの皆さんと農作業を通じた交流活動を行っています。

こうして大変苦労してよみがえった棚田もまだまだ課題が多く、サミットを契機に全国各地の関係者の方々との意見交換や交流を図り、棚田の更なる保全活動が展開出来ればと考えています。現在、松崎町ならではのサミットを考え、準備を進めていますので、是非とも「富士山や南アルプスを望む石部の棚田」に、たくさんの皆様のお越しをお待ちしています。

(静岡県松崎町 企画観光課 山本 公)

